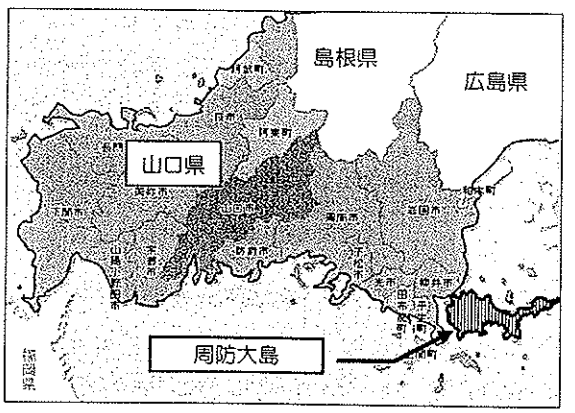
110名の犠牲者を出した明治時代の天然ダム災害（山口県）

◈ 井上公夫*，判野充昌**，大平米司***，髙橋　透****◈

1．はじめに

三方を海に面する山口県には大小約240の島があり，このうち，最も大きな島は，面積128㎢の周防大島（すおうおおしま）で，瀬戸内海の島としては，淡路島，小豆島に次ぐ広さを有している。現在は市町村合併により周防大島町１町となり，約２万人が住み，本土側の柳井市とは全長約１km の大島大橋により結ばれている。

周防大島は，古い時代から近代に至るまで，大規模な土砂災害が繰り返し発生した履歴を持つ島である。地元の周防大島町の町誌（旧大島町の町史[1]）には，これらの災害の史実が記載され，民間出版物にもこの災害についてまとめた資料[2)3)]が存在し，慰霊のための石碑（写真－１）も数カ所に残されている。また，平成17年（2005）の国の水資源作文コンクールで，地元の女子中学生が，石碑を題材にした作品で受賞[4]するなどしている。



図－１　周防大島（周防大島町）の位置

一方，山口県内の有史以降の既往の自然災害を漏れなく収集している「山口県災異誌」[5]に，後述の郷坪大水害を始めとする昔の周防大島の土砂災害についての記述が全く無いことに代表されるように，砂防行政を含む県中央の防災関係者には，これらの土砂災害は殆ど意識されて来なかった。

今回，これらの過去の大規模土砂災害の跡地の現況を６月中旬に調査する機会を得たのでここに報告するものである。

2．周防大島の土砂災害

旧大島町の町史[1]によると，当地の災害で被害の大きかった事件は表－１に示す３件を始めとして，幾つかの伝承が残されている。

このうち，明治19年（1886）の郷坪大水害は，大雨で生じた天然ダムの決壊で110人の地元民が一度に亡くなったものであり，１箇所の災害としては，山口県の過去の災害史の中で最大のものである。

なお，近年においては約30年前の昭和54年（1979）に，周防大島では６月の梅雨前線豪雨により，土石流，地すべり，崖崩れが多発し，島内で死者３名，住家全壊６棟，半壊17棟などの大きな被害を受けている[6]。

3．周防大島の地形特性と災害発生場所

＊ Kimio Inoue　財団法人砂防フロンティア整備推進機構技師長
＊＊ Mitsumasa Banno　NPO 法人山口県砂防・防災ボランティア協会理事長
＊＊＊ Yoneji Oohira　NPO 法人山口県砂防・防災ボランティア協会会員
＊＊＊＊ Toru Takahashi　NPO 法人山口県砂防・防災ボランティア協会会員

表－1　周防大島の昔の主な土砂災害

災害名称	被害概要
戸田の大つえ【天保二年六月五日（1831年7月13日）】	六月五日に戸田・久保庄の山の七合目あたりからおよそ40間四方くらい山が抜け出て，瞬時にして久保村22軒を圧し埋め，そのため68人が死亡（遺体発見は30有余人のみ）した。
郷坪大水害【明治19年（1886）9月24日】	9月20日ごろから毎日豪雨が降り続き，24日になって屋代川支流久保川の薬研谷に崩壊によって小規模な天然ダムが形成され，それが夕刻に大決壊し，鉄砲水となり，110人が死亡した。
文珠山の山崩れ【明治26年（1893）10月14日】	10月14日の大暴風のため洪水となり，蒲野村の文珠山に山崩れがおこり23人が圧死した。

周防大島は，600m以上の山を4峰も数え，低く小さな島の多い瀬戸内海の中で，特筆すべき高さを持っている。島は花崗岩を基盤として，山頂に火山岩を乗せた高い山々と深い谷から構成されている。河川が運んだ土砂で谷部に沖積平野が一部あるほかは，海岸部は断崖，絶壁をなすところが多く，平坦地はごく限られている。

史実に残る土砂災害は，何れも，島内で最大の河川である2級河川の屋代川の流域界を形成する山地の内側と外側で発生している。

今回の調査メンバーの一員である井上は，資料の記述と地形図判読結果を突き合わせ，上記の3つの土砂災害のみならず，主要な各土砂災害について，それらの発生推定位置を地形図上にプロットしている（図－2）。

4．郷坪大水害について

郷坪大水害について，旧大島町の町史[1]より，以下に抜粋する。

「この年は一体に雨が多かった。9月20日ごろから毎日豪雨が降りつづいた。23日になると屋代川にはとうとうと濁水があふれた。堤防の決潰が憂慮された。24日になっても豪雨は止まない。支流久保川は急傾斜であるので白馬が走るような奔流に人々は胆を寒くして，早くも志度石神杜の御旅所の高所や西蓮寺に難をさける人が多くなった。久保川は，一名鳴滝川ともいう，全長約4キロ，郷の坪，銅（あかがね）両集落の境を流れている。その源は谷川に発していて極めて急勾配を流れ，その両岸は険阻な崖になっている。特に字石満から上流では，両岸がけわしくそそり立っていて，深く切り下げられたその形が漢方医が使う『薬研（やげん）』に似ているので，薬研谷の名がある。

水源地である谷山の地盤がゆるみ，その櫟ヶ迫（くぬぎがさこ）という部分が崩れ落ちて，狭い鳴滝川の水路を埋めたので，薬研谷の両岸の間に水をたたえ，降りしきる雨に漸次その水量が増していって遂に支えきれず，両岸が崩壊して土砂を押し流したので，そのあたり一面の水となり字登々六では，窪地をあげて海のような水溜りとなり，たちまちに炸裂し湖水をうつしたほどの水量が土砂，岩石と共に一大音響を立てて郷の坪におしよせた。それは，その日の午後5時ごろであった。

郷の坪は，そのころ人家が密集して，大工，木挽，石工，鍛冶屋等の職人をはじめ木綿商，紙製造，紺屋等の手工業者から，酒，豆腐その他農民相手の小売商もあり，郡長，郡長代理などの住宅もあって東屋代では最も繁華な集落であった。

天地もさけるかと思われる大音響と共に，百千の奔馬のような濁流が，ものすごい水煙を立てて押しよせてきたのだ。見る間に家を倒し人を呑んだ。郷の坪は眼の前から消えてただ水と砂礫とに代ってしまった。

上卿の坪に志度石神杜の一の鳥居がある。そこから100坪くらいが一段高くなっていて通称鳥居が壇といっている。そこには，まわり1丈7尺もある栴檀（せんだん）の大樹があった。ここで水勢が二分されたためここだけが小島のように洪水から取りのこされた。しゃにむに逃げおおせた20人ばかりがこの栴檀の根元にしがみついて水禍から一命を守った。鳥居が壇のすぐ下の島家その他郷の坪で残存したのはたった2，3軒に過ぎなかった。

図－2　周防大島の土砂災害発生推定場所（図作成：井上）

河内倉之進は濁流にもまれて上になり下になって押し流されること２キロばかり片山の川岸で救われたことは，奇蹟的だといわれた。

地獄の絵巻物をくりひろげたような騒ぎの中に日が暮れかかった。その時再び一大轟音が聞えた。第二回目の洪水の襲来だ。しかし，この時は用心していたので命を失うものはなかった。こうして夜に入った。施す術もなく人々は西蓮寺，浄福寺などに集まって炊き出し飯を食い，不安な一夜を明かした。

25日の夜は明けた。さしもの猛威をたくましくした豪雨もけろりと止み，風も静まった。見渡すかぎり大石，礫，土砂の平原と化している。いたるところ着のみ着のままで親や子の死体をさがしているのもあわれであった。やがて太陽がキラキラと輝きはじめた。我にかえった人々は手分けして死体の捜査にあたって，屋代川の沿岸はいうまでもなく小松海岸，浦野，沖浦海岸遠くは大島，笠佐，神代，伊保庄など各方面をさがし求めた。しかし，遂に７人の死体は見つからなかった。死者110人であった。

それから毎日のように棺桶を作る槌の音が晴れた空に物悲しくひびき，葬式が毎日のようにとり行われた。」

以上の記事から，郷坪大水害は，崩壊→天然ダム形成→決壊による災害であることが分かる。また，そのダム規模は，集水面積が小さいこと，河川勾配が急峻であることや，現地を歩いた限りでの地形状況から判断して，あまり大規模なものではなかったものと思われる（高橋個人の感想）。

同年９月28日付けの防長新聞[7]は，この災害発生の第１報を次のように伝え，“山潮が破裂”と表現している。

「大島郡の惨報：

我輩は一昨日来最も驚く可き惨報を聞得たり曰く大島郡東屋代村に於ては，本月廿三日の午前三時頃より東風徐（おもむ）ろに吹き起こり正午頃より小雨を添え午後六時頃に至りて風雨共に烈しくなり翌二十四日の拂暁より暴風雨いよいよ猛烈を極め加ふるに俄然背面の山腹より山潮が破裂して同村字郷の坪と云ふ所に於ては同日人家を倒すこと四十余戸　之に圧殺せられ或は溺死したるもの百有余名に上り目下久賀警察署に於ては其圧死者乃死骸及び財産等を発掘中なりと云ひ又或る説には，大島郡長田門慶一氏の居宅の如きも実は此災に罹り衆家一族悉く非命斃れ独り郡長のみ其時他を巡行中にて不在なりしを以て危災を免かれたり　又同郡役所書記某も非命の死を遂げ去たり云く此の報未だ確報には非らざれども取敢へず記して確報乃至を待つ」

この災害から３年経った明治22年（1889）に，押し流されてきた巨大な自然石を碑材として，「千人塚」と称する洪水記念碑が屋代川河畔の郷之坪バス亭近くに建立され，今もきちんと手入れされている。

資料「大島発祥の地　屋代村の史蹟」[8]は，この郷坪災害が，島の社会経済に重大な影響を与えたこととして，

「砂原と化した此回復に十数年を要したが砂田の復舊に困り切って布哇（ハワイ），亜米利加（アメリカ）に出稼ぐ者多く遂に今日の全國有名な移民村の源となった。」

と記し，さらに，江戸末期に発生した大規模な災害が伝承として残っていることを次のように解説し，大災害が当地で繰り返されたことに警鐘を鳴らしている。

「所謂『千人塚』の記念碑文によると，六百年の昔正慶二年（1333）に此地に大洪水があったとある。そして其際鳴瀧川の位置が現在の如く變って，西連寺の下には後川と云ふ地名が残り，崩（つえ）の尻（しり）と云ふ地名は山崩れの最下點を示し，砂田と化して砂田部落の名が残ってゐる。又郷之坪なども可なり低地だったと見えて井戸を掘れば一丈位も底に田泥が出たりするのも此際の洪水の為めと云はれてゐる。これ等の點を合わせ考ふれば正慶二年の洪水も可なり大きなものであったと思われる。」

５．精査の必要性と情報の活用

今回の調査は，「郷之坪大水害」「文珠山の山崩れ」「戸田の大つえ」の主要土砂災害３箇所の現地を，約４時間の行程で見て回るという駆け足の調査となった。現地をご案内頂いた，県柳井土木事務所の光永調整官，郷土史家の中原勲先生に地形図や資料を頂戴した。

中原先生には，要所で詳細にご解説頂き，地形条件やおおよその位置関係などはよく理解できたが，短時間であった上，生憎天候にも恵まれず，遠望があまり効かなかったのが残念である。

今後，大縮尺の影像図を携えて山中に分け入り，

現地と史実をつき合わせながら，当時，どこで，どんな現象が生じたのかなどの論証を行い，理詰めで過去の記録を詳細に再現フォローすることが必要ではないだろうか。

このような作業を通じて，約120年前に起こった郷坪の大水害を始めとして，周防大島の過去の大きな土砂災害を，より精確に，詳細に描写することが可能になり，地元の方々はもとより，“山口県民にとって，大規模な土砂災害が決して他人事ではない”ことを知っていただく格好の広報教材が用意できるものと考える。

郷坪大水害の儀牲者を悼むための第50回忌前年（昭和９年（1934））には，災害の悲惨さを後世に伝えるための災害記録として，「屋代村郷之坪明治19年大洪水実録[3)]」が編纂されている。その最後の締めくくりとして，当時の関係者が後世に託した次のメッセージを，我々も重く受けとめるべきであろう。

「鳴滝川の水源地たる谷山地方の山崩れは，幾度か繰り返された事は事実である。従って，将来と雖もかなり警戒を要する事は大いに考慮しなければならない点である。即ちその土質を地質学的に調査したり，或いは地盤を固める為に植林を研究する等の仕事は，後人の重要な役目である。この事を強調するのは，我々老人の老婆心であると同時に，この小冊子編纂の一半の目的である。」

6．あとがき

今回の調査の参加者全員を写真－３に掲げる。

左から３番目の人物が，郷土史家の中原勲先生（山口県地方史学会会員，周防大島町文化財保護審議会委員など多数の要職を務めておられる）であり，昔，理科の先生をしておられたそうである。

左から４番目の後列中央の人物が，県柳井土木事務所の光永臣秀調整官（工学博士，元県庁砂防課土砂災害防止法担当補佐）であり，公務ご多忙中にも関わらず，中原先生への依頼や我々の現地の調査段取りをお願いし，現地へも同行して頂いた。

また，今回の現地調査には，周防大島をモデル対象地域とする土砂災害の予・警報避難システムなどの研究に取り組んでおられる，地元の山口大学の古川教授にも加わって頂いたほか，天然ダム等大規模土砂災害の調査研究を手がけている㈶砂防フロンティア整備推進機構の井上を始め，土砂災害防止の啓発活動に取り組んでいるNPO法人山口県砂防・防災ボランティア協会の判野，大平，高橋が参加した。

写真－３　現地調査の一行の写真　左から高橋，大平，中原，光永，古川，判野，井上

中原先生，光永調整官，そして今回の調査全般をご支援頂いた城ヶ崎正人課長を始めとする山口県砂防課の皆さまに，心からお礼を申し上げたい。

当該地域の一連の既往災害に関しては，さらに調査を深めて，また，改めていずれかの場において詳細な報告を行いたい。　（文：高橋）

〈参考文献〉
1）大島町役場（1994）「周防大島町誌　復刻版」p592～609
2）山口銀行（1994）「防長歴史探訪㈤」p313～315
3）藤谷和彦（1999）「屋代村郷之坪　明治19年大洪水実録　復刻版」
4）藤井絢子（2005）「命の水」全日本中学生水の作文コンクール受賞作品（山口県優秀作品）
5）山口県（1953）「山口県災異誌」
6）NPO法人山口県砂防・防災ボランティア協会（2007）「今，振り返る～昭和54年，柳井・大島地区をおそった激甚な土砂災害～」
7）防長新聞社（1886）「防長新聞縮刷版（1886(9)～(12)」
8）藤山康一（1939）「大島発祥の地　屋代村の史蹟」